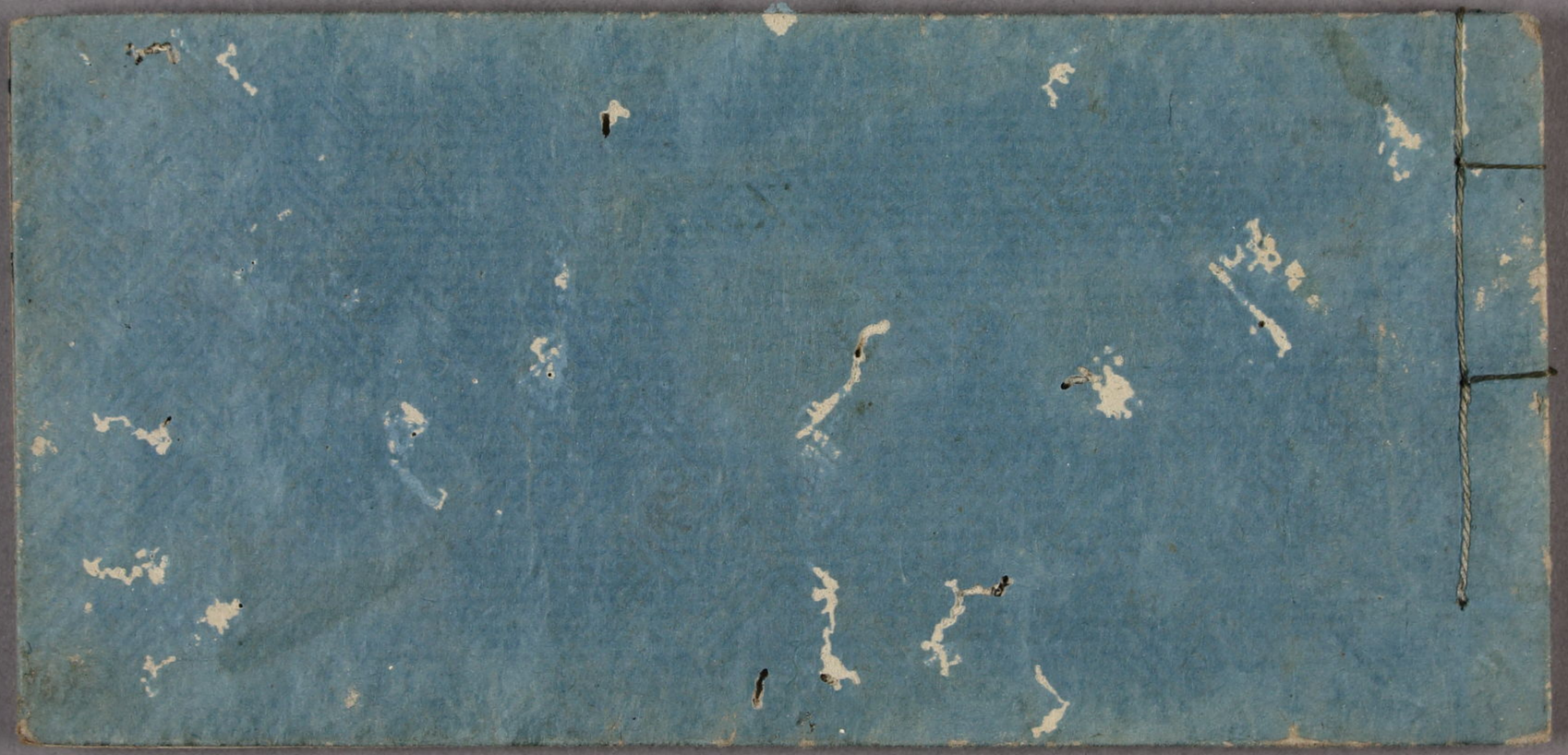

三冬之部目錄

△印ある八前より季ふ用ひきたるなり

時令之部

△冬の風　冬一丁
△冬の日　冬一丁
△冬の雨　冬三丁
△冬の月（月まし）　冬三丁
△山眠る　冬三丁
△寒夜（冬の夜）　冬三丁
△冬の暁（寒き朝）　冬四丁
△さむ空　冬四丁
△さむし　冬四丁
△凍　冬四丁
△はめる雪（六花　六出）　冬五丁
△雪山　冬八丁
△雪粥　冬八丁
△雪花（六花）　冬九丁
△雪肌　冬九丁
△ちづる雪　冬九丁
△雪空　冬九丁
△雪聲　冬九丁
△雪消　冬十丁
△富士の雪　冬十一丁
○雪中之趣
○妙霜　冬十一丁

霜柱　冬十三
霜花　冬十三
霜氷　冬十四
霜夜　冬十四
はだれ霜　冬十三
氷花　冬十三
氷厚氷　氷花
氷衣　氷の衣
氷蠶　冬十四
露氷　冬十四
鐘氷　冬十四
氷の轄　冬十四

冬混雑之部

部ハ明冬時令草木ノかゝつらぬる風をいふ

炭　切炭　池田炭　炭頭　炭團　輪炭　炭屑
炭竈　炭焼　小野炭　冬十五
獣炭　冬十五
榾　骨薫炭　冬十五
廻炭　冬十五
白炭　菽炭　冬十六
賣炭翁　炭賣人　冬十六
炭斗　冬十六
助炭　冬十六
炉　圍炉裏　地炉　冬十七
埋火　炉火　冬十七
塗炉縁　冬十七
火燵　置こたつ　冬十七
火桶　火桶　火鉢　冬十七
手炉　懐炉　手焙　冬十七

湯婆　冬十七
蒲團　冬十七
食　夜食　小食　壁食　朝食　ゆうさと小食　ゆけの小食　冬十七
紙衣　紙ぶすま　冬十八
頭巾　角帽　冬十八
綿　綿打　延綿　唐綿　綿襖　冬十八
足袋　冬十九
束綿　綿摘　冬十九
綿帽子　冬十九
綿衣　冬十九
水洟　冬十九
脛　冬十九
皸　冬十九
寒瘡　女柒　冬十九
薪　冬十九

冬草木之部

胡蘿蔔引　冬十九
葱　冬葱　冬十九
枯野　冬十九
冬木立　冬十九
寒草　冬の草　冬十九

冬生類之部

鷹　兄鷹　冬十九
雉　冬十九

△大鹿狩 △鹿呼
△狩場雉
△力草
△ぬすと立
△鹿匠
△鳥叫
△千鳥 △川千鳥 △村千鳥 △小夜千鳥 △ちどり 三浦島 △廣千島 △島千島 △ハまちどり △夕千島 △ちどり千島 △ちどり千島
△鷲の食
△鬼 △真鴨 △小鳥 △黒鴨 △鴨 △羽白 △ひたきさく △ひたきさくも △流見 △ひたむちつ △ひたち 鳰鳥
△水鳥
△鶴
△鰤 塩鰤
△蛎
△追鳥狩
△馬の落草
△教草
△鳥立墓
△列平繩
△鹿犬 △狩杖
△鷲の首
△鷲 △鷲鷹
△木兎
△雲鵬
△蛎舟
△浮寐鳥

△鯨 △鯨突 △鯨突 △鯨舟
△鮒
△夜鼠引
△竹筍
△河豚 △ふと汁
△海鼠腸
△永魚 △永魚使
△網代 △網代木 △網代人 △ネしろ守
△柴漬
△潤眼
△生海鼠 △海鼠 △金海鼠
△鮪 ○初の身

必用之部

此部ハ冬の天氣うらなひ其外養生等まのと

飲食之部

△切干
△生薑酒
△鍋燒
△風呂吹 △大根蒸
△柚味噌
△料理献立
△雜卵酒
△杉燒
△納豆汁
△蕎麦湯 △そば粥
△菖蒲漬 △菖蒲葉

三冬目錄終

○此書の大をいろは引みしく月令以呂波分惣目録と題号を名づけ別ニ壹冊出しけれバ季節ニ用ゆるのハ勿論季節に用ひざれくぬ物とても俳狂の便ニなる事又ハ月並艸木魚鳥の異名和名古名ハ聲ニあくぶひくりいろは分ニ出す。本書ニ注解のくるぶかし紀のの又ハ出所の落る物ハ此目録の條下ニ辨明して本書ニ二處三処ニわかつて委き訳ハ何れの物よりうごかして紀物皆目録ニて見るべし

あきの部をみれバ △沖津鳥 冬廿二丁
この部△恋し鳥 ともあるべし

あきの部 △秋湊 九ノ六十三丁 訳ハ春湊ニ出
春の湊の所と見へし 湊のさけらるゝ

みなの部 △水無月 六十一丁 万葉出
水無月の出處万葉集ニ本文ニかゝる故此処ニのせ

余ハ准之して知るべし其外狂・俳・詩・哥の便ニなる事多く載る故此目録をかりそめも會席などに懐中して失忘ニ備ふべし

三冬之部

冬の異名和名冬の神等も十月の初にしるす

時令

此部ニハ冬三ケ月の時候ニかゝる事をしるす

△冬の風 漢ニ…と讀又音寒く吹…を云

占考

冬南風吹ハ三日が間霜多し寅卯の日風ふければ其月ハ風多し

(哥) 秋やその楢のはるニ…山のおろしをさむけき… 式部

…まつの葉のこゝぬを…わろ風のきけしれ 為家

(俳) 冬の風…ても背おせ 野明

…波もとかくつまの風 蓮二

(詩) 冬風五字對句

黒帝行威肅 冬ヲツカサトル神イセイガオゴソカニシイ

飛飄意氣雄 カゼヲツカサトル神ノ心イキモスサマジイ

同上

雲岳千岩痩 雲モツクタケモ風ガフケバ岩ガヤセテミエル

霜林萬葉飛 シモノフル林モカゼガフケバヤナギノハガトビチル

詩 冬風

出自薊北行疾風衝塞起　鮑明遠

薊北トイフ所ヲ出テユケバハゲシイ風ガ陣ゴヤラフキタヲスヤウニオコリテキタスナモコイシモミナヒトリデニトビアガルユヘ牛モ馬モスクンデ子ゾミホドニナツテミエル

沙礫自飛揚牛馬縮如蝟

冬霧　秋の霧ほどふかくハ立ぬ　冬のきりうんとかく水ぎぶ立

哥 ちらてわさ淋もえつぬさわ川よきりもくやわまのよるる南くん　基俊

あしし山ふもとをくるる川きりの　為家

詞 ゆるやけ、千もる迷ふ。ねえくさもき

俳 ゆるやう外まるくまれ一ハれの雪二水

狂 ゆるぎうれ日ハ波ゆるうも個代ち　和水

冬日　黒道として北のうるをゆく　ありよりうれく日をドうし

哥 ほ〜〜をねてやのあ此ひよ〜て　物ほふめうるみの月ひうけ　采世

詞 ほぐみ、ぎげ。ゆぐほどぶき。よいれ　月かげ。さんぎ日のげ。雪ゆうろ〜

俳 その月や人待舟の械はうり　許六

その月や物ひとりふ奴のあゆミ　湖春

狂 月ふかりくあ〜この月のあ〜きぶ　るよろこんでゆくまうろく　鶏明

詩 冬日五字對句　同上

忽忽短晝光　漸過三竿外

セハシクシテヒルノカゲカミジカク　ゼンゼンニ竿ホーバカリノボル

融融浮和氣　初添一線長

ノドカニシテアタカナケシキモウカブ　コノゴロハジメテタノヌヒハリノ糸一スヂホト長クナル

白居易

詩 冬日詞

杲杲冬日出照我屋南隅

トミタハ冬ノ日ガ出テコチノ家ノ内ノスミヲテラス

坐和風入肌膚貧暄背日

ウレシムイテスハレバ

ノドカナ風ガハダ　初似飲醇醪又
ヘニトヒルヤウナ

如蟄者蘇　春ハシメノホドハヨイサ
ヤウニマリタガノチニハヒニ

ノイテ井タモノガイキ返
カヘリタヤウニナリタ

外融百骸暢中

適一念無　カラダノソトハコヽロヨウユハニデカ
カラタダケ

タダウガヒルヤウナリバアウハ

曠然忘所在心與空虛

ヤスラカデナニ
モ思フガナイ

俱何トナク心カヒロビトシテカウシテアサルコトモ
ワスレテコヽロハ虛空ト一オナジヤウニナッタ

冬日　唐宮中ノ女ノヌヒ針ノワザヲ以
故事　テ日ノ長ミジカヲコヽロミハカル

冬至ノ後八日ニ糸一スヂツヽ多
クヌハルヽト云リ唐雜錄二西

冬十月　△月さゆる△月をさきと
枕草紙ニ老のけさいふ

たくさいともぐれたものなり
さゆるハ澄きよたの甚しきなり

哥　拾遺集　友輔

月のおとしはの水乃さやけさを
月のひかりのとくるなりけり

千載　平實重

夜をかさねむとすれ水の下ぬる
そらふくもとゞまる月哉

夫木　大納言經信

名ばかりよろこびてめる嵐かな
むへとろ月をく風ふうる

續古今　家隆

なかめつゝいく夜袖よりうゝん
附ふふくる冴ゆる月

詞　氷こそとる。このえにする。指くま
うえた。雪ふかふくこのまさうぬ。

みくれ竹のまをふ。雪にたゝ紙とる。
氷ともさりぬけ。雪ふまおおく。

非　樂毛のあ浮又ゝく冬の月　蒲丈
冬月やつまをきこそ月も松ハ松　其角

狂　こゝろいとくやミのゆゝ見る顔ハいや
光のけそいなきさるおゝ月　貞左

冬の雨　冬の雨そこはふゝ
多くハ雪ふすゝハ雨

哥　ふるあのそるにうゝ冬の雪
嵐やそふぬこほゝん　為家

「この里ゑそかきつりふねに外山をそれハもるそつたれる　大笠

俳　冬の面影ふまれつる板屋かな　羅人

原の雪もいれてさひしき冬の雨　加十

狂　なぐさくも山ハ深くまつるゝそのあ
つれすゝドアにたゝ紀おこせと　信德

山眠　冬の山の姿をいふ。四季の山乃
姿をいふる詩あり次ふ為ん

詩　四季山之詞　卧遊錄ニ出

春山淡冶而如笑　春ノ山ハアツサリトシテ人ノエメルヤウナ

夏山蒼翠而如滴　夏ノ山ハアラクトシテクルホフヤウナ

秋山明淨而如粧　秋ノ山ハサッパリトシテカザリタルヤウナ

冬山慘淡而如眠　冬ノ山ハモノサビシウテシヅニウタたコロナリ

右の詩の心を以て季に春ハ山笑ふ
秋ハ山粧冬ハ山眠ると三ツ出して夏の
山滴を書に月ひざるも俳の掟〻〻

△寒夜　△冬の夜。秋の夜ハものさ
びしさにたゆうかめる物ゆ

こゝそれよハやうかゝりてさむけに
たゝうゝある冬の夜のさはゝり　為家

冑　天木

おのゝ世いろく星くの春の夜さむをゆめ
ぬよりあ

俳　冬ゝれハねゝれと寒ハ為ハ冬ゝ支考
夜中寒し冬の夜ふくまそ添ふ　一鼠
冬きき夜ハ外山ふまるそえん　泉志

狂　うゝれめも行ふをうんてをの板ハ
あゝんきうけくゝ　ゝのまゝ　道久

詩　冬夜七字對句　詩礎

起看北斗寒垂地　鴛衾冷

俯听長江流有聲　獸炭消

曉角催寒漏　冬夜五字對句

孤燈旋落花

アカツキノフエノ音ガサムイトケイヲモヨホシ

ヒトツノトモシビガヤモスレバハナヲオトス

冬の暁 さむき朝 (俳) 曉や我つけ初る格の子 竹兮

(哥) 雪玉 わきの見こなれ添くなる曉のおもうそて袖ふおもき月かな

(詩) 七字對句

屋頭木葉飜寒片 茅店月

墻角梅花吐暗香 板橋霜

詩礎

さむ空 (俳) さむ空や木ワヽ見ちらく鳥存 宙存

さむし (俳) 三日月の一筋さむしいつく為 支考

凍 あぶ燈。凍ハおる序ゴホハ。らぐ寒気ふるうくまるるるうこぐ寒いこるくく訓のこるるう

(俳) いもかくの弥さ下女歩ろ廊ふ 猪柳

はつたき 枕草子ふつめるれたるたき

(哥) 玉葉 冬の月風やあるーむを声つめるれ

(俳) 冬のうちも春のおけく後施 山林

(狂) 後金ハつりくきのを湿まりふけあくくまるくいいくいくん 梅翁

雪 (異) 六花 六出 故事ゴウ 飛瓊。縢 (名) 玉塵。銀樟。六霙。

雪ハ豊年の瑞ゴウ 雪女其外雪ゴウ 麥くくく天地惑問珍ゴウ本に出ル

(哥) 古今集 冬こかりのちりひけぬを木のるるうる花とこるるるくるるるくるるるる 毋貫之

山家雪 定家

待人のふりくのろ雪 絶ぬくく雪

彩雲の枝くくるるるるるる

田家雪 実蔭

(詩) 山ふる緋田の菴乃杉ゴウ

外山ふるけてくくるめ

柏玉 遠山雪

[illegible]
雪のかへしの山のそ乃ゆれ

雪五　谷雪

[illegible]の雪にそをかそして谷の戸に
雪乃楷やさえ入らんもも〳〵哉

同　川邊雪

[illegible]の上にうもつり白は氣霧川
さくまやくれの雪ふ及くん　為家

夫木　湖邊雪

[illegible]やはられ山ア風海うけく
ひくんみるひくも雪のそく雪　[illegible]

風雅　行路雪

[illegible]人の先さ[illegible]乃ちこわ[illegible]
行[illegible]ようもまよふ雪うの　小弁

夜雪

[illegible]の戸ぬ[illegible]
つり行る雪のひかりうとて　為家

夫木　名所雪

[illegible]
所もこうぬ[illegible]

詞　降る。つもる。かきくらす。かきたまて。ちりくる。白妙　初雪十月の條ふ

山ふ　紫人の[illegible]

拾遺　阿ハ　[illegible]

きゆる。氷のくふ[illegible]る　風ハ　ふぶき。雪

げのうゼ。雪まゼ。又雪ふハ風の[illegible]

るよ[illegible]をよむ[illegible]　海四ふ　降ふふまど

つりうぬ。海士の[illegible]の[illegible]。雪ふ

たるう[illegible]。雪[illegible]の[illegible]る海ふ。[illegible]

の[illegible]ふ[illegible]ぬ。[illegible]ハ高[illegible]ど白

[illegible]人のけ[illegible]

いくふ。[illegible]人の[illegible]

木ふ　木くの花。梅[illegible]

ぐふ。十二人[illegible]の花ふ[illegible]。梅ふま

ちらせの[illegible]。梅[illegible]ふ。松乃

うぬ。[illegible]。余所の[illegible]

除雪ふ　[illegible]

木[illegible]

。かきくく。そう。雪降。雪さ降

。右のふ要記ふけ。土ふ[illegible]

(連)
朝きよめ雪にかくする柳かれ　豊通
世にふるや雪の深山のかくれ声　紹巴

(俳)
我雪とおもへば軽し笠の上　其角
市人よいでこれうらん雪の笠　芭蕉
雪折ハ引切り竹や雪気の湯　宗甫
雪ふれとおもひても雪ははまこと見にけれ　德元
雪も重し淺路ハ笠の船の如く　文考
笠と雪されハ風のうき夜の雪　麥太

(狂)
雪ふれる窓を帽子にかうろうて
かしらさむくれ大ひえの山　宗增
雪ハ雪らしき雪らしきまぬ白妙ハ
ひとりにねうる天地の内くろし　貞德
ころもかへて世にさえんの白ハあまど
わるかしくたとる袖まくるかり　貞柳

(詩)
雪五字對句　同上

天地無塵事　妬舞時飄袖
天モ地モユキガフリテ　コレノチリモナシ
テヲヒルガヘシテ　マフトキニ　ヒトヲネタムカ

江河有篆文　欺梅併壓枝
江モ河モ　カキ　アラハス
梅ノハナヲ　アザムキテ　エダヲオシタワム

拂樹驚梅早　尖峯排玉筍
ハラヒテ　キヲ　オドロキ　ハンノハヤキヲ
トガツタ　ミネハ　タマノ　タケノコヲ　ナラベタ

凝階類月殘　圓石疊銀盤
コリテ　カイニハ　ツキノ　ノコルニ　ニタリ
マルイ　イシハ　シロカネノ　サラヲ　カサネタヤウナ

(詩)
雪七字對句　詩礎

三千世界銀成色　把長沙
サンゼンセカイ　ギンヲナス　イロ
長沙ヲ　ニギリテ

十二樓頭玉作層　沒樵路
ジウニロウトウ　タマヲ　ツクツテ　カサネタ
ボツス　セウロヲ

看來天地不知夜　梅花信
ミキタルテンチ　ヨルヲ　シラズ
ムメノタヨリ

飛入園林總是春　柳絮風
トビイル　エンリン　スベテコレ　ハル
リウジヨノ　カゼ

雪　瓊林　玉樹　冷艷　寒光
詩詞　呈瑞　散銀盃　花意思　鋪作月

詩 雪詞　唐祖詠

終南陰嶺秀積雪浮雲端
終南山ノミネガタカフニユレバツモッタユキモクモノハシニウイテアルヤウナ

林表明霽色城中增暮寒

同　柳宗元

千山鳥飛絶萬徑人踪滅
山々ノユキニトリノカヨヒモミヘズイヅクノミチモユキニウモレテヒトロ〻モナイ

孤舟蓑笠翁獨釣寒江雪

雪日本之故事

香爐峯雪

はしちく出させなひてかくるむるのあるうさぬいぐいらんとおぼせられ多れば御前よ在さる清少納言ことぐハちくて御簾を巻上へうり帝ことの外感じ給ひとうきこれ次ふもろ〻詩の心を合せうるかう

雪ふくふりたるけさ一條院

詩 朗詠集　白樂天

遺愛寺鐘欹枕聽香爐峯雪撥簾看

コノ詩ハ樂天炉山ニイフトコロノ山莊ニ居シテ東ノカベニ五首ノ詩ヲダイセラレタルノウチノ第四ノ詩ナリ廬山トイフトコロハ遺アイキトイフテラニチカクカヤロオリソノフモトナリ

俳 捧あるますれ内ふまるの酒　蝦明

雪ふる時ハ藏人所の衆大内ふ參して藤壺ふ雪の山をつきしゑ一条院の時より始て後伏見院永仁のころ迄ハ白ゝと今ハ絶さり洗章帝ふ曰志ふすの十余日のあとに雪ゝ降うるを臣史ふ式部丞忠俊ゝ仰られ侍ハ雪ふ出しゝくおもしろの山作志ふ成ぬ不ことゝ

俳 雪ふ八一夜間のるゝ成るの山　霞外

雪の粥　雪のふりたるけさ藤原仲文院の御所へ參たる院の御粥おもしろのハせて哥ゝあと仰られ侍ハ

哥 白雪のふりしきけさの白粥を

いとうくふるる初ふるうみ
俳　白雪忘世月のかたさを椀の粥　東窓

粉雪　たまぐく草のふれく粉雪
丹波の粉雪とゆつを雪ハ
よねをつきふるひくるれ似くれしばいく
なう潮こゆれとらへべきを丹波とそぞ
鳥羽院稲くれくれ〜〜と讃岐典侍日記ニ出
るふかく仰られ〜と〜〜て雪のふ
俳　山風ふきの粉雪さうるひ蝶　呉郷
卯月杵とうて粉雪とふくする分香

雪唐故事

柳絮　謝太傅安トイフ人兒女ヲ内ニアツメテ文ヲ講論ス俄ニ雪フルヨツテ兄ノ子朗トイヘルニ問テ曰白雪紛々何ニカ似タル朗答テ空中ヨリ塩ヲフラスガゴトシトイヘリ又兄ノ女ニ向フ答テ曰柳絮ノ風ニヨツテ起散如シ安モ奇オヲ賞シテ悦フ世説新語ニ出

俳　ふるゆきはこれかつけても揚ゆハ連国
花と起ル風よりくまるの柳ふハ素仲

齧雪　蘇武単于ニ使ス単于トラヘテ北海ノ上ニオク食ニ
冬シ卧ナガラ雪ト毳毛トヲ齧テ数日不死遂ニ漢ニ歸ル

放馬　齊国ノ管仲旅中雪フカキニアフテ道ヲ失フ其
時老馬ヲ放テ行クニ任セテ隨ヒ
行バ遂ニ道ヲアヤマラズトカヤ

雪花　△六花。天上ニ瑞木アリ雪ヲアツメテ瑞木ノ花トス
△六の花とふハ。草木の花ハ皆五出
なり雪のみ独て。六出有と月令廣義ニ出

俳　馬の尾ふるの花ちる山路ふ支考
雪ハ降ハ降ハ六ツ六ッのこなゆ文洞

ちばらし雪　木の葉ちどにつりたる雪のさらくとを
△四
つ〜〜といさとふつり

俳　ねておきねを〜〜をこそ〜〜ふる荷風

雪肌　世間美人を賞する言葉ニ
雪をあらはしてをる

語ハ季ニハ隨分季ト云ベシ　これらの事ハ衣ゝの例もあり

雪空　雪催ひの雪気　(俳)雪の空々　用ゐ〻の耳ふ新し　一晶

霜と星とハうゝハ響きの空　梅五

(寄)

風ふくと思ひし雲に新りうく　為相
風ふるけの空ゝをけき

雪聲　音をいふ

(俳)八坂小裏表ゆゝ雪の声　嵐雪

(詩)雪聲詞

石泉凍合竹無風夜色沉
沉萬境空　イシヒノイヅミモコホリガハリツメテタケニカゼノオトモセズヨルノケシキガモノシヅカニツソリトシタ

試向靜中聞側耳隔窓撩亂撲春蟲　フトモノシヅカニウチニ耳ヲソバダテ、キケバ、ドコヘダテ、ハラ〻ト春ノコロムシガヤウジニアタルヤウナオトガスルユヘアケテミタレバユキガフルノデアツタ

雪消　昔ハ雪多くふる時ハ餅餅并菓物を互ハ相饋る　(十)

これを雪けしくゝ是を喰ひて寒をわとるゝとゝ心うゝ　日並記事出

富士雪　富士ハ四時雪ゆゝ　御傘ハ雜ゝ又通俗

志連哥ハ芭蕉ハ冬ゝ此事大ゝ論ゆゝ委く補遺ハ出ル

(狀)雪中之文

朝來六花呈瑞彌望為一色之瓊瑤來歲之豐可知矣差拙畏寒徒斂衣安閉門擁炉唯仰神仙来賞之而已

○書賛寒氣　歳暮の條見合ベシ

妙　寒中の雪水を貯へ置くよ用ゐれバ一切の熱毒を解を

茶

雪中夜寒手足こゞへぬ法　○胡椒を二ツ割ろくくいを

こかし紙よく氣のぬけぬやう
に包み膀にあてよし

△霜(しも)

朝霜(あさじも) 夕霜(ゆふじも)などいへど多く曉(あかつき)がたよりおくものなり

(哥) 新古今「霜さゆる山田のくろのむらすゝき かる人なしにのこるころかな 慈円

夫木「しもかれのまくずのはらやおきぬらん なにのうへのたつもしれずまで」 俊成

同「弓張にねし待よりもさらしき八 あふくれる道へのたけふの 定家

同「秋の霜さえて嵐のつまりし松の色 よもすがらひとり月をみるかな 後九条内大臣

拾遺集「おもひやるきみがくもゐもさむけき 霜のよにひとり寝ぬらん よし信

柏玉 曙霜

「ひとつれを心にかくる人や 曉き野への霜のあけぼの

同 朝霜

「あさの日のいかにけれる軒の霜 さしむかふにかれえゆく

(詞) はつ霜の霜。霜の名残。霜の枝たし。霜枕の帰るかし。よそほひて。おきつゝ。霜のむら消。袖さむし。霜をつぐる鐘の音。霜かゝる野のむら、霜のむら消。霜おく。身にしむ。かれ野のかね。故郷の霜。白髪をいふ。松のはつ霜。故郷の霜。霜とける。松かつまる。よのうてな。霜のむ。霜遠のべ。たきゞのくほね霜。霜をふる霜かけて霜げしら

(連) 声をけてさらく霜の鶴見ぬ 宗祇

霜の霜おきとものひきぬ 仝

(俳) 一つ家や一霜ぶくの霜の霜 支考

霜の花やこねの岩に猿作す 自徳

(狂) 徒の霜のおく霜よりももたさひ かのものなくきえてゆく 貞徳

霜のなどは猿とはいえし松かくされの のちられ霜かくる雨になれる 貞馬

霜之故事

鄒衍哭(スウエンコクス)

鄒衍(スウエン)トイヘル人燕(エン)ノ惠王(ケイワウ)ニツカヘテ忠ヲ

尽ス左右ノ人是ヲ妬テ讒言ス主怒
ニ人行ヲ獄中ニ入ル術天ヲ仰テ罪ナキ
ヨシヲ呼ブ夏十月霜大ニ降リ淮南子ニ出

鶺鴒畏 霜ヲ畏ルヽモノヽ季ハ三月ニ出ス

鐘聲 唐ノ魚豊山ト云ル所ノ鐘ハ霜
フレバ自ラ鳴ルト山海經ニ出

霜柱 寒ツヨルトキ谷ウケ又陰地
ノ野辺ナドニモナク土高

(俳)霜さへもかゝる柱と幸の神 金波

(哥)夫木 谷ふき岩会ふとてる霜柱
降ぬこそりる絶ぬうらん 光俊

霜花 三月花。霜濃く屋上ふれば皆百花の状あるといへ
ども三月の花ハ氷の花の轉音なり又雪
を六ツの花といふ也霜を三ツの花と云や

(俳)書のうも日数ハ
書とれの字 霜の姿菓から
冠柳

霜氷 霜ヲかぶりて氷る

霰夜 (俳)人さへも指ふ動ふる
言水

(哥)古今引ふらふ天ハ人ふねまの
そのさやく声あよどころひとりぬる

はだれ雪 霜 (哥)夫木 公實
雪ふ同じ 十月に降

ふるとはだれもあふるをのよハ
降のうハ毛もいふふ白らん

氷 厚氷 氷花 氷衣 薄氷。ひ
(異名) 氷面鏡。氷の和訓抄

むゝーハひとゝつゝ徴ふこほりと
三字によぶ事ふろうゝ。ひもかゞ
みハ氷のそりる面が鏡のやうに
見ゆる故ふ名づく氷の花ハ氷を
花と見ゆゝるゝ氷の衣ハ池川
ふるのたるがきぬふ似るようふや

(哥)引つけしよとのわうを々さゝ
れいとけんこもるおーふそう 兼盛

池あや氷とくらんかのこのもの
数ふくふのさくるるれ 行資

氷のおれ池の氷乃さやけきハ
月のひうれみうくゝろ ちすみ

續古今 谷氷 為尹
(歌)しらずやたえしらるをせきとめし岩ねの
山くちふもなくおちてたき

新勅撰 湖辺氷 内大臣
(歌)さゝなみやおのへをせくこほりの
波もこほりてあとよりやこゆるらん

柏玉 葦間氷
(歌)月影をへてまだこほらぬ汀より
あしの下葉も波ふくちなき

夫木 薄氷 小侍従
(歌)けさはしもうるはしかりし[illegible]の汀も見
野もせのまくさ[illegible]おもしろく

(詞)とめてかへておる。嵐おちおる。[illegible]の湊。[illegible]のかゞみ。
入江。山陰。おの袖。網代。音なき。山川。[illegible]。[illegible]の[illegible]。
[illegible]。[illegible]の面。おち結ふ。汀のおち。[illegible]。舟もとゞめぬ。うへ波おる。波さゞく。
しの羽風。[illegible]戸ざる。

(連)一[illegible]のかゞみ 宗祇

(俳)涼しさや[illegible] 白羽
あふ川[illegible] 正秀
[illegible]松 嵐雪
[illegible]松 其角

(狂)氷うへの上も氷のそれ[illegible]日吉 入安
[illegible]十慶

(詩)氷七字對句 詩礎

寒生玉指紅先透（カン シヤウズ ギヨクシニ クレナヰ マヅトヲリ）
サムサガ玉ノヤウナル指ニコタヘテ氷ヲモツテノアタイロガスキトヲル

先遂金刀翠欲消（マヅ オフテ キンタウニ ミドリ キエント ホツス）
先ハコガネノハモノヤウデ氷ガハリツメテアルバ青イ色ハキエテ何モカモ白ウミヘル

寒侵玉（カン ヲカス タマヲ）
サムイイロハ玉ヲモヲカシ

冷浮銀（レイ ウカブ ギンヲ）
スサマジイイロハ銀ヲウカベタヤウナ

氷ノ故事 狐聽（コテイ）
河水氷ル時狐是ヲ渡此後人モ氷ノ上ヲ行 述征記出

○本朝信州諏訪ノ湖モ氷厚クシテ人馬氷ノ上ヲ往来ス先ッ狐来テ渡初ルヲ見テ人モ行キ通フ又春氷解ベキ前ニ狐帰ル是ヨリ人モ不渡トイヘリ

△氷聲　氷をさくく割ふる氷はくだくて氷をさくくぐき又舟をさすくく棹ふてもうつこの此音をとこゑくの

(文)楊延秀雄手敲氷文曰

穉子金盤照曉氷彩絲穿取當銀鉦敲成玉磬穿林

響忽作玻璃碎地聲

ニハヤシヲイヒヤワチ　オーヨ　サスヨ　オモハバキ　ニハリノタ　ニカ　地ニオチテ　クダケル　ヤウニ　オトガシタ

△露氷　露結びく霜とうるくよ

△鐘氷　かねの音のくこえて氷るが如

のつも手足ふ寒氣の入く氷るが

おくれをいふかもも是ふおそ

△氷の轄　氷解るかう　(雲州抄ふ出)

(哥)夫木　為家

△冬ノ手ハ田川よりてる水車

おのくさいくさくくり

冬之混雑

此部ふ日令時令草木ふどのくらくぶる品とのとる

△炭　(別名)烏銀　(種類)△切炭△池田炭△炭頭△輪炭△炭團

右の外種類ハ次ふ記ル今攝州池田の辺ふくやくりの池田炭又切炭

といつくく日本諸州の茶人ふ此ところの炭を用ひくぬ木ふく

やくといへばくぬぎ炭ともいふ

△輪炭ふ池田炭の大成物を薄く

切たくく形車のごとく如く故ふ名づく

△炭頭ハ炭の俵一俵の内ふ十と十

五と大ふくうりのあるをつくうり

△炭團ハ炭を粉くくにたくうる物

△炭竈　△炭燒　△小野炭。和哥ふ

よむ炭がまの名所ハ小野

△山城　をくはふ山同　ちくご山常陸ふ

ごとくうまりく小野炭とりく

○山炭がまハ山のくぼ地を掘りかまを
ぬり薪を多く入れ炭を焼く

(哥) 拾遺集 源山あをはるかなる小松の炭の煙 好忠
夫木 ふるの炭やき衣きれぬとそ
人きなく人のたのひりのうハ おかく
詞花 山ふかみやく炭の白い煙 ちろ
やうくゝ立ちけりの手とめ名の ノ 匡房
金葉 炭ちまにふん煙さへ小ゆ山ふ
ちるけのこまちの人内ちあけり 師時
新古今 司数方ちけふやさう炭ちれ
ちちちらしーき大系の星 式子内親王

(詞) をゝ木。すゝ高き。々ちうさしーき
とこがまの山。樹のもとが俗。あびく煙。
々ちうふちりう。ちのるふちうる。けちと
ふきーく 一風。炭やく衣。炭焼々ちう。
○々ちうこのぼるる氣をよ沉ちう
人やりたる藤をよむ宮き氣はよれ
年ハちとくたきやちちうちうちう
(俳) 炭やきの淺ふく水も赤い 支考

炭屋の山住雪も炭とろう 忠恕
天ふの炭ハ安炭も世話をやき 秀信

(狂) 白妙のようにとをとこ人やくも
ちちうちうなる小みく淺屋 家卿

(詩) 炭詞　東坡

豈料山中有遺寶 山中ヨノヤウニ宝カオキテ有ル
トハオモハナンダハ 磊落如驚万車炭 クロクくト
シテウルヒノヤウニツクロクタノクルマニノセテ出ルスミヤ 流膏迸
乳光人知 コノスミヲタキバアブラヲ流シルヨタギラスコトヲシルモノ
モナカツタ 陳 清風自吹散 ヒトテアラフガ
りづくノキヨイ風ガ イキリヲフキチラス 根苗一發浩兆
際 コノスミヤクヤウニ木ガハエルコトハ根モミハエモホウモナイコトジヤカ 万人鼓
舞 人看 ヒトタクヒトガヨロコンデクチハスミヤ
投風潑水愈光明 炭ニヤイテ火ヲ
ヲテ水ヲカケレバイヨ 爍玉流金是精
くヒカリカヤク 燿 火ニヨツテカラハ玉ヲモトロカシカネヲ
モナガスホドナイキホヒモアルモノジヤ

炭之故事

胡桃炭　唐宋ノ世ニハ炉ノ炭ニ多クル三ヲ用フルヲ上トス

獸炭　唐ノ年琦ト云ル人炭ヲ獸ノ形ニ作リ酒ヨファメムトカヤ

△製法ハ炭十斤鉄屑十斤食塩糯米ニテ子リ乾テ用ル時ハ火キエズ

榾　△ウロ火△骨薫炭　ホタのかくいハ株杭ノ木の根を灰の中ようづ其上ヨ火をこけバ自然ニ火うつ

つゝく山中ゐど埋火の用ゐ哥

みもわくこのうづみ火きどころ

(俳)　鬢ニ長百歳の祖父やかくい炭　左東

廻炭　炉中ヨ炭をくむ埃皆古のたゝ

はゞあるゝの置る炭を

あげゝく客人おかしくふ置ゐをんをつ

(俳)　二の揖のそ化を命ぜ口ずゝ其裔

白炭　花炭△枝炭。多くハ鄭蜀の木を焼く灰中ヨ埋

みめをバ白くうるゝ枝の形ある曲枝

炭もいみ。河州北の瀧ゆくゝ

花炭も同所より出或ハ梅の花も

ふやれ竹ゝ葉ゝもゐ存ル名品ゐり

(俳)　白炭や若いうるゝの枝　二柳

賣炭翁　△炭賣人ゝ(俳)　炭賣や

徐の淫ゐ曇をる其角

(詩)　賣炭翁詞　東坡

積火変深黙火ニヨリ上レバ牙角

鄭怒怒　角ノヤウニナツタ火ノ

イキリライカルヤウニミエル

炭斗　一名烏府。炭入る器ゐり

ふくゝ又ハ籠みどいろくゝ

助炭　助炭ハ炭をたとくゝと云て

炉のゐゐしのことゝ

爐　△囲炉裏△地炉。炉ハ今茶人

の用ゐハ方一尺四寸ゝ。山家の

もの又寒国のものハ其製大ゝ昔

堂上ふゐゐとも其製大ゐゝ

埋火　△炉火ノ哥ヨ炉火の題ハ埋

火を詠ゝ。又ゐゐ訳ハ前ヨ出

(哥)　夫木　山炭のくゝさ合せ埋び火の

ゐくゝもゐくて世ゐゐ　俊成

埋み火のあたりやすらかにけぶりもなくこもれるこそ　式部親王

詞　うきおこし。埋火のこと。炭さし。香炉。埋火のもとくまろ。まるの炭をかきおこすをさしぬ。ねざめ　眠覚ハ　かきおこし　「暖かい」　埋火のそば　炉のもとに　おきび　炭ハ　おこし

こたつ。ひとの埋火。きえやすぬ　思ふ。うとましき　述懐　埋火のいきぐるしいみてかきたてしかなさとのいはくづに火のこえんばかりもしらつくばのみねのくるしさを

連　埋火や　其のトつしやもは　昌休

うつむいたよひ〳〵　扇やまるの窓　紹巴

俳　埋火や我と二人のうちうし　其角

埋火やねゝひるおのふてゝ　支考

埋火やゆゝ紀ゆこそ〳〵　女　許六

詩　炉ノ詞　楊審

天地風霜日夜新　天地ノ間ニ風ガ吹クリシモカフツタリ

地炉穏坐煖如春　炉シテヒルモヨルモイツカシサウナ

筋骨已暢心無用　スチホネモヒロクトシテナニモコロガヒハナイガ

人　イヨ〳〵ハツカシフ思フフハコヽヤウナトキガクモンスル人ハマドノユキアカリデ書ヲヨム人モアレフ

詩　炉七字對句　詩礎

客来寒夜火爲媒　且呑一声　サムイヨニ客ガクレバ炉ノ火ヲ　カツムニエオトガムセブヤウナ

煖酒仍將羊栗煨　蚯蚓鳴　サケノカンヲシテサカナハヒツジトクリトヲムシテ出ソウトオモフ　ニエオトガミヽズナクヤウニキヨル

塗炉縁　春ハイこう立ても木地の炉縁を用ひ冬ハ是を用ふ

火燵　置火燵。こたつ　ハむ〳〵公し近世の好こうるべし　支考

俳　侍ハ後ろ切るふこたつ　支考

宴筵は猶さらし　全

世を乱しの笑ひ加る巨燵　許六

柳入の枝こうの行ん成うえ　景州

狂　指掩ひ片見ハおろう猫らくへ

はるさーのこそこそ　楊柳

△火桶 △桐火桶 △火鉢。火鉢を近世の名なり。火桶は昔ようの名なり。今土あくを作るを火桶と唱ふれども昔は物一ちゃぶて火桶といひ〳〵

哥 拾遺 ゆきはのふきみを火桶宮ぢをうゑしくつまとうれしくもつゝそや

俳 抽ん丸火鉢ふかけるはの煖茶竜 ゆきすりや雪ゝ火鉢のわゝいろけ 柳素

狂 おいとぬつまとゆきふゝ 相火桶 南和 ゆふけくゝとても〳〵

△手爐 俗よこ手焙小さき火鉢の事なり △懐炉

俳 一役はたれもまゝ炉の時ゝ 青飛

△湯婆 脚婆。銅又土にてもつくる湯を入るゝ器なり〳〵足をゆたゝめる身もあゝむ

哥 拳白集 さむきあしもゆふをへく ゆふ引ふれ武蔵ゆ山とを思ふ

俳 ゆゝふたゝ尔をゆ口を閉たるゝんぼゝ 來山

△衾 △敷ふすま。ふとゝ 寒夜ふ引ふすまて寒き夜を忘れしとをもむ

哥 ゆふ引ふすまつまとゆもいふ足 風もたゝぬ麻て小ふとゝ 家房

夫木 きゝてゝもゝ麻紅の衾ふすま みゝふようをは きゝてゝ麻を 忠房

詞 △小ふとゝま △あ門字ふすま △麻ふすま △あさで小ふとゝ麻の小ふすま △ゝの衾 △古き衾 △麻ふすま △たけの小衾 △ゆふけの衾。ゆふげの衾。ねゝのくゝたち。

俳 ユ夫ゆふたゝふ衾ゝ邪 荷兮

詩 衾ノ詞

龍紋巧織・呉綾・美鳳彩新粧蜀錦・香 龍ノモヤウヲオリタテタゴノクニノアヤガウツクシクホウワウヲイロイトデオツタ

ショクコウノニシキ　燕寝覆時篭翡翠合
ガウキタツヤウチ

歓擁・處效・鴛鴦
クヮンヨウトコロナラフ　ヱンヲウ

フトリノモヤウモコモツテアリ婦人ヲイダクト
キウチキレハモヤウクヒドリノヒヲスルヤウチ

蒲團　ふとんとハ蒲の穂わた或
稲わら芦の穂などを入れ
ふるものなり木綿ハ近世の事し

俳　むかしのふとんの敷けふ芭蕉

狂　きく坂重のあさくかつくねうるとふとんよみをわすりかひ　千竹

紙衣　△紙衣ふとん△紙衣ともをり
老人の着てかろくてよく風
をふせぐ也へよ製ともるなり

俳　昔せ紙の手前紙なれ其角

頭巾　△九頭巾△角ごきん。法樂づきん四角ハ仕立ようを帽と
いひ丸くこしらへるを帽といふ漆
でぬりたるを冠といふ唐令ハもろ
くの時服をたまふ冬ハ頭巾一枚
ともあるこれハ礼服をいふなり

日本ようくハ頭巾を着ず人達
事を無礼なり

俳　頭巾と袍かうかうハ襟改支考
老の夏のきるあるも改巾ハ五樓

足袋　堂上ハ四季ともふ召ば
民間冬の用なり

種類　。皮足袋。刺足袋。木綿足袋
。雪駄。ぞうり。ぞうり品ハあり

狂　我ハ〳〵ハ永ともハ〳〵ハ華ぞうり
芦ハふねの掉もハ〳〵ハ芳室

綿　△綿打△綿操△延綿ハ唐綿
わたのうけ七三秋の部綿取の條出

東綿　△綿つむ△臂綿。右いづれも
わたを作れる形ふるを名づく

綿帽子　婦人の頭巾ハ婦人頭ふ
いたづくを礼とハ夏ハ
羅ハ用ひ冬ハ綿を用ひ

俳　狂ハ女ふるとハ絡帽ハ舊里

狂　絡帽ハ小もものちけ情ハ
二八の眉乃山のりくき　與財

△綿衣 真綿ふてゝ衣中ゝの如く製へる物なり名づけて冬の下着とす

△水凍 寒氣の節鼻より水乃ぐるれりの出るをいふ

△胼 寒氣の節人の手足にゆる病く

△皸 いの甚しくて口のひきて切るゝ事

△寒瘡 冬手足耳などの赤くくれるをいふ いづれも冬の病なり

(俳)ひきれは垢をなをすてひうる備 松子 ゆ浮ゆいさゝ初ゆる猫の耳 其角

妙 霜ゆけハ蛎の売身ともに貝を 其角

茅 火ゆうけ其汁のひつさとうけて

○胼ゆハ山蜂の巣の黑ゆに飯つぶ

ゆて付る。冬氏の皮又西氏の皮の事也

ると胡麻の油そ付ろう又せゝゆ

てもよし猶くゝハ妙某博物筌ゝハ本有

冬艸木

(十)(土)如斯印ゆハ十月又ハ

十月の季ゆも用ゆるの〻

△薪 なきゝハ四季ともに伐るゆゆれ

ど哥ゆそ冬の題ゆよりり

胡蘿蔔引 本艸綱目ゆ見時始テ胡地ヨリ来ル

△根ノ形人參ニ似タリト 故ゆ本朝ゆて名づく

(俳)ゆ名ゆの冬ハ細ゆ形四ひの一海

(狂)ゆ名ゆのおりひとあてハ名ゆ出て

つひよゆもゆふゆ名ゆなる 貞柳

△葱 △冬葱 △福ぶうのひともし

(古劇)紀 和名抄ニ出タリ 一名 芫荽 根ゆ

く入く喰ゆ根をよゝとゝ

色ゆよ福ぶう又福ぎなゝゆ又中

空なる色ゆうゆかぐさともゆ又

丸く長くゝゝ枝ゆゝ故ゆ一文字

と名づく 三才圖會ゆ出ゆり

(俳)ゆ名ゆ蝶ゆれてねぎの白髮ゆ青袖

(哥)職冬哥合ゆ行ゆ世て妹ゆ名ゆ

うゆほゆ名ゆ名ゆ名ゆとゆ名ゆ

△枯野 艸木ともゆ冬枯ゆる野をゆ

さひしき景色をよむゆり

(哥)いろゝゆの花色ゆの〻ゆ名ゆ出ゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆれ 有家

草ハ[illegible]
いろ〳〵の[illegible]のさひしさうなん　光俊

(俳)[illegible]
[illegible]　東史

(狂)[illegible]
[illegible]　京景

△枯野　枯野ふ同じこれもそこハ木艸の枯枯なる野をいふ

(寄)万葉[illegible]
[illegible]　赤人

(俳)[illegible]　騎窪

△冬木立　冬ハ[illegible]枯木のもりさと
[illegible]多くハ十月の季とす

(俳)[illegible]　朝三

[illegible]　昆吾

△寒艸　△冬の草。秋よりこれ殘
霜の下にある草をいふ

(俳)[illegible]　昆吾

冬生類

此部ハ三冬ニわたる生類をあつむ

△鷹　(古名)くちばし　鳥　截玉集ニ出　かゝ鳥。う柴

種類　△兄鷹　△弟鷹　△鶴鷹　△鷂　△鴨鷹　△兄鷂(この鷹)　△雀鷂(小鷹)　△雀鷹(その雄)　△隼鷂(ハやぶさの雄)

△鷦鳥。鵰(ともに雄の雄)　此鳥寒夜ニハおのれ足の姿をうしへ小鳥をくつゝみ〳〵横ふわるなり　(壬)朝この鳥をくゝるどゝくゝそなちとこに
[illegible]に甚飛ひやく方へその日ハやうとと
いつてこれ天性の義なり

△角鷹　たうの大なるにて○鵰(くまたか)
[illegible]

(俳)[illegible]

(狂)死んで[illegible]
[illegible]

○右の内△このうち△さは△ゑつ
さい等ハ小鷹也秋くもを見合へ

大鷹狩（おほたかゞり）

△鷹狩（たかゞり） △鷹野 ふたつあり 一ツハ小鳥をとる
ハ秋よりハ大鷹をつかひ大鳥を
とるハ冬なりされども鷹狩と
いへバおしなべて冬とさだむるなり

（哥）夫木　　俊頼

御狩する末野のはらに雪ふれバ
かりのくらの心もとなし

ふきおろす比良のみやまのあらしにや
目つけの鳥のこゑもよわる　国信

御狩場ふもとのあき風もかけてしるべに
ふりしきる雪の雪に（下）おれ　雅経

（詞）御狩り。御狩。かりびと。かり手。
はし鷹。あしぶの鈴（あしぶのすゞ）。
やかた尾のたか（尾のふ矢の羽に似たる又屋形の様のふちに似たる）
の鷹の鈴。たまさの鈴。ぼうぶくたか。
しろふる鈴（てうかくもとぬ）ぞくへる（山より狩）
とかへるみよりの日の（たかの右の）なきさの
羽をとる（羽をとる）
鈴のね（とりおこふさの鈴）尾のくらの付
鈴。そでの鈴。あすしれ鈴（なかなかのせみ）
方をとる（さゑがり）とぐちつなぎ（ふぐを取）つけれのもの。
ひくもの。山のくつれなく立る山のくちのさとまで
草がくれ。鳥の狩（かくれたる）。岩脇（とうだく）。せこの勢（せいこ）。
こねぬすまる。かりびと雉子（きじ）。いつ
きのとまり（とよのとまり）
（禁中へ毎日）（のくさ）（かり）

[作ふ八] かたのゝ小野。おもかけ（やけの）のかれ。
[業ふ八] 狩場のとのゝ宮（しん）（かりば御とのゝ宮ともいへり）。月
[作れ八] （かりびとの狩りにいでて）
雪（こゝろ）狩場の八重なるをおくよみ合せてし 或ハ
（うつくしく）狩場のかりのこえぬうちにいふ
鳥の羽（こゝろ）

○狩場の名所ハ春日野（大和）交野（河内）
其外あまたあり。池の汀の長さハ淡ふかるれ

（俳）大ぐちてとゞめ狩人の里夜具其角
味なくもへ残りてやぬくめる　簾光

（詩）鷹狩七字對句　詩礎

新豊（シンホウ）樹裡（ジユリ）行人渡（カウジンワタル） 騎似雲（キニニタリクモニ）
新豊トイフトコロノ樹木ノアイダヲ人ガ渡ルニ 騎ハ雲ニ似タリ

小苑城邊（セウエンジヤウヘン）獵騎廻（レウキカヘル） 帶禽歸（オビテキンヲカヘル）
小苑城ノアタリヘ狩リノ人ト馬 ヲ帶テカヘル
ニノタカヘルノデアツタ 三ナノ[illegible] モツテカヘル

(詞) 鷹ノ詞　無名氏

・故鷹　・制鑌　・北風　・迴草　・盡
・平原　・使馬　・開（メカノモトヲリ風ニナビキテノメグル冬枯ノ）
・臂上　・角弓　・如却月
・當場　・意氣　・射生來（ヒチカケタル弓ハ月ノゴトクツカニトラセユミニ射ナドスルカリバイイサマシイモノジヤ）
・追鳥狩　列卒をとりかこみ雉を追出し〳〵くるる所いく
・狩場の雉　鷹におろし　木居（なをを止る木ノウヘ）
・鳥の落艸　落艸。鷹小鳥追れ艸の艸たう落草とむらすゝきなどかゞの事ふちびなければ秋とゆる藻塩艸ニ出
・力草　たゝの鳥をとらるゝ艸をちら〳〵につゝむといふ

(寄) はしたゝの老の立ゐのたゝなゝてゝのびゝもゝれちゝゝゝゝゝ　行定

・教草　鳥おゝる所をたゝふゝゝるの鳥を落しかゝるところを落艸とゝく其落艸のゝく羽をひいくちゝゝもるなり
・ぬす立　ぬす立鳥。ぬき立鳥　鷹狩ゝ鳥のおそれて艸かどにかゝまるゝるがむそうふ飛といふ又たゝふゆひく艸のかげを飛ともいふ
・鳥立幕　鳥の立ゐもゝいくこの所へ狩人のゆくなり

(寄) 新古今五月雨のハ行方もなきに堀まくゝゝとちもゝへ（ゆくゝれて医房）

・鷹匠　たゝをつゝくゝ人をゝべゝくなるゝゝゝも鷹師ともいふ
・列卒繩　せこハせむる子とゝゝゝ追ゝるものをゝ
・鳥叫　鷹とよぶをゝふ（枝折　蔡出）又狩人の声（紙ゆげゝくなるを追立るとゝゝ又鳥のさけふ声を聞ゝ鷹人のたゝとゝとゝゝ

鷹犬 狩杖。鷹うりのこと。犬を鷹犬と云

狩杖は鷹狩のときに引回く犬杖のことなり杖うり

千鳥 正字衡と書異名いそ鳥

物は奥の詞の條に印有見合べし

千鳥はかもめの類にてせきれいに似て

小江川。海。入江等水辺に在て群居

沿ばうびくうく也ふ千鳥といふ

哥 夕されは佐保の川ふの川風に

友すとりなくちとりなく 友則

風に吹ちとりなくなくとこきけは

夕ゆくちとりとうえ吾ちくうう 顕仲

柏玉集 月前千鳥

月のうりれは秋ことに月の友ちとり

なくやまくも浦つたひして

雪玉集 濱千鳥

月ふよふれはいふふ友ちとり

月もまなもきよさ濱也

同 泊千鳥

月くゝみる月もはりし氣こまくく

あこうあるくさよるのとりは

同 湊千鳥

みなとさす夕波ちとりなくなくん

よるとうえへくもんもうらん

碧玉 岸千鳥

月くゝもあるをてもさを礼はつれ

ふねさ月きくれはみるちくく

詞 △川ふる △村ふる △小夜千る △志ふる △浦ふる △濱ふる △友千

る △ちくちどう △夕ちどう △ゆるふる △住ちどう。夜千る。浦ふる。ひとはう。

やちちく。よびうふと。ゆれかへう。

ちどうる。浦てひひう。ふるわ

さる。たけふる。たちねなく。こも

ちくう。ゆがひのもの。友うぢちどう。こね

ほれ。かくもぐめず。やちと。

哀 ちどりハ妻こひふるさまあはれハ也其つよさくおもしろおかしきおもむきろ

妻こふ。妻こふ千鳥。妻なし千鳥。

旅 海辺の旅ねにあはれなるの声にたゝくうきうきひのおかひをそふるもの也

浦枕。波のうきねの夢さそふ。夜寒。

紀路 人の旅ねをするのおとくいへバ浜千鳥ゆくへいつくを行衛も知らせぬり

浜ふ鳴跡をきく跡ともよみえり

○みなるハ五条気の面白きんをいひ又鳴なるの声添くおかしなることあま

りて悲しくて水辺のあはれをよむなれバ川の名海の名水辺の名のみにて合すべし

○海ちくハ浮のみ川る時ハまくよう浮のひる時ハ干潟より波ふ添ふて鳴なめる

連 塩干や浜ふとへなん川ぶなる　紹巴

待さそふ浦にいやそこな友ちどり　仝

俳 ちくてまるな千どりや舟の浦　呂春

立波のあふさくちどりとりふ　嵐雪

狂 ちよくとみちよくと友ちどり浜のまはるふつきたる浦うる　貞柳

△鴛鴦（をしどり） 異名 匹鳥（ひつてう）。文禽（ぶんきん）。雄を鴛（ゑん）といひ雌を鴦（あう）という水の

上ふ浮そふおとども又水よねる事をもよありつがひをまもれちだて深きハ此鳥の情（じやう）なり

寄 新古今集　経信

冬ふかしやさもてよ行ねふ独きるをしのひとりね

金葉集　前斎院六條

夜くれなのうれ羽をかさねてやをしの毛衣さえまさるらん

夫木集　越前

浮きうんせ田の奥ふ小夜まくらはまやおもうをしのつまを

詞 をしのつがひ。羽がひの霜。うちひて浮ぶ。玉藻（たまも）の床（とこ）。をしの村なる。をし鴨をしと鴨と浮ね（うきね）の床。ならびのとし。をしのうき毛ふおく霜。つがひぬをしのひとりね。をしの毛衣。羽ハ水なるの氷え合すべし

連 冬さむふひやまくる鴛なるの羽まるかひ　宗祇

能 寄ろくハ鴛なる水ふ影坑　水庄

鴛なるやいつも袖をはぬらしけり　雲巾

狂　ひんやうしをの女房のをきい
あるうたせんくの神　芳室

詩　鴛鴦詞　古師老

江島濛濛烟霭微綠蕪深
處刷毛衣　江中島ガモアノトキリデミエルアイニオシドリガキレイニモゴロモヲヒロフテ井ル
渡頭驚起
一雙去飛上文君舊錦机
ヘンカクレバソコヲオドロイテ　タツテメオトヅレデトンデニクハサダメテ卓文君トイフヤウナウツクシイ女ノオツニ井ルニシキノ上ヘイテソノニシキノモマウニナルノデアラフ

詩　鴛鴦五字對　同上

文采負奇色　和鳴多好音
イロクノウツクシキモ公奇妙　夫婦ナキカハスニヨイナイロヲ負フタトリジヤ　コヱガ多イ

白頭心共在　交頸意何長
ハクトウ　コヽロトモニアリ　カウケイ　ヒロ　ナシ　ナガキ
ツガヒノヲシドリ　交シタガヘ　ヲシドリハ　ヒヲ　ハチガヘテイデトオモフ心ノ互ニアルトリジヤ　ツモコロ　ノカハラスモイトミヘル

鴛鴦故事　韓憑鳧

大夫韓朋一名憑ト云ヘル人妻甚美之
カンボウ　ヒヤウフウ　ハウ　ビ

康王コレヲ奪フ憑怨テ自殺ス妻コレヲ聞テカナシミ或日王ト臺ノ上ニ上リテ遊ブトキ臺ヨリ落テ死セリ懷中ニ書アリテ憑ト一ツニ葬ヨヘトシルセシカドモユルサズシテ塚ヲナラベテ別々ニ葬シカバ一夜ノ内ニツノ塚ヨリ木ハエテ上ニテ枝ト枝ト相連リ鴛鴦来テ其木ニスム朝暮カナシミテ啼コレヲ連理ノ枝ト云搜神記ニ出

鴛の衾　夫婦なかよくしびふれ所の衾をいひ（鴛ふとんハ又をしどり）
をぬいのふしくるる衾をもいふ。
又をし鳥の水みなくしび居をいふ。又
をし鳥の雌雄翅を交く卧るを
もつてことごとくをし鳥の相ゐるにたぐへ
めでゝ鴛鴦帳鴛鴦幌などいへり

商　ちりくぬをの衾のおもひかも
ふみ代をさめぬるやくのたゝみ　家隆

鴛の沓　堂上方又ハ僧家ニ用ル
鼻高ク反ル沓

其形鶩ノ翅ニ似タル故名づく
○又反ぬ咨を鴨咨くらんうう

鳧 鴨の字ハ俗字ニ 種類△真がも △小鳧△ 鴨△黒鴨△水鴨白△

△あきひ△さきのも△沉鳧 異名 青羽鳥 古々集ニ出タリ。沖津鳥 万葉集ニ出タリ

寄 拾遺 おおあゆ神さたさるみを乃ふかきのふ毛を刈しころもき 公任

千載 朝ぼらけ入江にかくる白ゆふの 顕輔
おぼろの月よりきれをしも

夫木 ゆされてきれ波ゆこそりしてよくれちるるあちのむらを

詞 うかも。たかも。うきも。けも。
うものうれ舟 ものうきを あしうも乃
くらくつどさつとくかもめ。かもの
うハげ。かつくうもる△あちむら△あち
の村ら 小鳥の雅名なり 英古かも
右の外ある鳥の條ニ見るべし

俳 鈴鹿野ニ多シ 岚雪
ゑるくと強江の野の深草ゆな 支考

狂 ちんてもめくりてもちくゆの中
ぶ川とりてゆふゆくかも 貞木

鳧故事

王喬舄 王喬葉縣ノ令トナリ神術アリ毎月朔且縣ヨリ朝ニ至ル其来ルコトシバ〳〵ナレドモ騎ル所ノ車ヲ見ザレバ密ニ人ニコレヲ窺ヒヨリ来ハ即其鳧ノ至ヲウカヾフテ網セヲハリケレバ一雙ノ舄ヲ得タリ則王喬ニ賜フ所ノ舄ナリ

脛短 鳧の脛短シトイヘドモコレヲ續ガハ則悲 荘子ニ出タリ

水鳥 水鳥甚多〳〵。天鵞鳥。鶩。鵜。かハせミ。鷺等〳〵

專寄ふさむハ。
鳥ひぢく丞さか成の前條ニ出ル

寄 おもふとなとこれのゆのこほまちや
うきうけうつくこひるるん 人丸
おゆ結人入にのまちあもまこけくゑ
みゝ聖るのまをもをけ〳〵 忠良

(詞)水あそび。うきとり。氷のうき。氷の
うへ。こやの池。さひけき松。さゆる松
うきね。むれゐる。つるの枕。羽風に水る。鴨どりの三も。
よとをうきもの。ほこて拾ひ。すだく。あるる
の下やとつゝぬ。みぎハ上とく。
ふるい。水の村をる。つゆせふる。よろくの色
○右の外をるかもの歌人食べ
(連)初やをきれをれるせあれる色 宗碩
(俳)うれをれのとふ中ゝ池のかも 嵐雪

浮寐鳥 水鳥のうれをゝ寐るとり。うき鳥を雑ゝ

(寄)宿ちくゝ寐まのあふうれ行て
ようひみかるをとしのうもる 隆房
(連)風ふけハ精もとーのうれをれ 宗養
妄月今や風ふ中ゝ池ゆゝき紅る 立英
(狂)きのまてふとゝ人をきをふ中ゝ
うれをの袖乃ひをうへて 舊四

鷸 此鳥巣を作る事巧なるあへ
○巧婦と名はく東雅に出ず

木兎 鷦。木兎ともゆ八月の季と
○月 ゆる委しく八月の條を見べし

鱈 塩鱈。俗ゆ大魚ともゆ肉白
○日 故ゆ文字雪ゆ和字なり
味ハ生なるも塩すー北海多くれ
をゝぶん若狭の口塩なゝるハ至
く絶品なり 細鱈大魚頤の下ふ
頤あり見へゝ頭中ゆ白石二ツ
ゝり性寒とゝろで夏月ハ絶て
ゝし南部 松前辺冬至の日より
是を釣初るといふ
(俳)かゝ笠と鱈ふきをる山路小 和重
(狂)をゝの一枝一雨口上も鱈く
〳〵ふ鱈の水ゝ 羅人

玉腸 鱈のわた (俳)雪ゝ中
ゝれも味のよ丸山 秀川

蠣 (名)石花。石ゆ生じてつきゝる
○花のごゝ。一説此貝雌雄
ゝ一汝のさゝゝる時を待ゝ口ゝ
ゝゝきゝ小むゝ人を喰ふとべく

汐の泡れ化して蛎となるの藝州廣嶋
より出るハ海中に竹垣を立て自
ら取付くなり海辺にて又
いけおく場所に養ひ諸州へ出す
くゆ味も中和を得たり
自然生のものハ大くて味不佳

(俳)蛎を干て海の底の岩の蛎石鎖
蛎むき手鉄ヘハさんこあれ其角

蠣舟　浪花川岸所々の舟と歩
てかき船南ふ皆廣嶋より
来りて他国の者已に冬月来る
同日に来りて越年して又同日に帰る

(俳)蛎舟の風ふくこそ利全
蛎ふるあるくをしるの丁　友岳

(狂)蛎殻と浪人の格の違ひ
ちらくくのあるうちは　道夏

鯨　△鯨突　△鯨舟　△鯨突　勇魚
万葉に出る　海鯨。雌を鯢と
い雄を鯨とも鯛ハど孝の事なる
也くらの形を大なるを寄に見立る

(俳)逃るもはしたつなる鯨に多鳳
弱いかつる夫おのりてら　金波

(狂)高見をなくら逃つきてゆつく扶
ふ紙おりくやこふ鯨なくり　喜木

氷魚　△氷魚使　昔八宇治川里上川
等より此魚を貢物に奉也

とそこれを氷魚の使とい委くハ
九ノ四十二丁網代の条に見るべし

按ふ氷魚和名こほり魚とい

(俳)ひいなの氷魚の徳や寒る　東向

或いのつるきやもすきて野坡
氷魚よりやはなさて白さ尺の屑　温古

鮴　(名)サイホリ。形ちえぜに似て小さ
し　大和本艸にも形ちえぜに似
と出さり。白魚に似たりといへハ非
いさごの形　白魚よりあしくとも

(俳)新嫁の涙ハさけ雪ハいさごに　瓢水
河よりは雪ふる乳のうしの思いさ　竜北溟

網代　△網代木　△網代守　△網代人
○川岸より木ばうちて網

の鷹のうたるゝ形にして永魚のたく
よひくいれで再ひ出る夏を得ざる
やうにとる〻網のかゝりにとる也へなこ
ゝろとゆゝ意にて所〻ろとゆゝ是まさ
くひ取ことを網代人とも網代守とも
ゆゝ委しく八九月生類四十二丁小出

元輔

(哥)拾遺集
月新の田上の川おさゝのけまハ
あしろのひとのようるもんへなれ

慈田

新古今
網代ゝ
ひとりやねぬるゝ宇治の橋ひ光

皇后宮肥後

金葉
おもの夏のよる川せよゝ風
うれもゝ〻ゝのうれ

夫木
みよゝ〻みよゝのゝ川のゝ
濱のゝゝゝゝうれもゝうりゝ

貫之

(俳)夏の夜にも公ハせいて網代ゝ支考
あしれせゝ網代の影夏ゝて芭人芭蕉

(狂)とりこん因果ゝ〻ゝ小車ゝ
あしろの夏のひをハふゝ

貞徳

夜興引 冬の夜出中の獣を狩時犬を引くこれをよこいくとゝ

柴漬 柴をふしとゝふ古言ゝ生柴を枝葉とも三四尺ゝふ切ゝ川水の浅きところふ積事水の面より少高ゝ左をれハ雑小魚ハ柴の下ふ集るゝふおゝく網を四方ふ張て柴を去れハ魚をくゝ網を入れ寒気の時ゝ立春後川水ゆるなるのふゝりてハ魚柴の下ふ集ゝ

○淀伏見其外所々ふゆゝれども比べて水の浅き所ゝくゝれ事なり

(哥)夫木
ゝとろゝ下て行ゝえ
のゝおさ五沢見ゝいうゝせん

俊頼

竹筍 釜 魚梁の末ふうけ置ゝ
ごのゝ沢のゝ魚梁れ
のゝゝゝうけ入る器ゝ竹ゝゝ作る

(俳)ゝゝゝ見て機嫌のゝハ井魚ハ二又

(哥)万葉 川ゝ釜ふせおきゝうゝ
いゝゝゝのゝゝと我ぬすまひ

潤眼 鰯の種類、円く長し眼大
うるゐ（十）

（俳）五節句に菖蒲の酒眼に十調
而初の妻宅へ来るうるゐ 乙州

（狂）なまぐさ坊主の目玉なるうるゐ 貞柳

河豚 ふぐ 乳。河豚ハ家の味ひに似
うとん

る也へ名づく。物くふれば腹ふ
くれ也へふぐとうく古名ふぐなり
暑なり。毒ある魚を心ある人喰ふ
へからず 西施乳といふ其腹の和ら
かなるを美人の乳にたくらるうり

（狂）名ゑ五ーうる孤に陰もるるめを
ふくれいめちをかけて寄らん 道乎

妙 ○ふぐの毒よりうるうるるを知ハ
茉 つハの葉のふぐ汁と用ゆべし

生海鼠 海鼠ハ金海鼠。とんを
なまこ

（俳）海鼠ハ胴ある間のなるを 正水

海鼠彦火々瓊々杵尊ノ時諸魚
故事 皆仕ヘ奉ルヲ申ス海鼠獨リ
細キ小カヲ以テ其口ヲサク故ニ
今ニオイテ海鼠ノ口折ノ是ナ
リ云ヘ日本紀ニ出

海鼠腸 （俳）こもれるや尾花のちり
ぬされいろを 完中

鮪 ○はつのこ。大なる王鮪中
しび なるを叔鮪小なるを銘子東国
ゆ〜ゆぐろと云ふ西国にて細と大魚
なる也ふ他国ふ切て賣を大魚の切身と
いふ初細のはーを昔賞ーなる也ふ
もんの多ら也今ハ賤物と成て上用と
なる

（寄）万葉 鮪つくるわれもせるいろ
火のもとハ生るん我下ありんを

必用

此部ハ三冬の要用ノ事ノ集ーる

養生 冬ハ夜早くいねて朝ハ日ノ
ようじょう 出るをまちて起るをよしとす

冬占候 ふゆの寅の日ふゆの卯の日雨ふれバ来春五穀のみのり高し又かのとの寅の日ふゆの巳の日雨ふれバ同あしたゝりし
きのへ子ニ雨ふりまたハ牛羊おほく死すそのつちのと卯の日風あれバ人民大ニ煩ふ尤風ふきて土煙をたてゝ雲のごとく空にまじりて黄なる色有ハ吉慶なり黒色赤色なるハ火災あり紅紫ハ吉なり

冬天氣 怒らぬさうなる雨ハ巳午の日晴れバ其月雨多し未戌の日曇るハ其月雲多し申酉の日晴ハ其月霜多し子亥の日晴雨ハ其月甚寒之

飲食

此部ニハ冬分人力おほく製しなる食物を集む

△切干 冬大根又ハ蕪を薄くきりてほし貯へ常ニ煮て喰ふ

△茎漬 △茎菜。大根の葉をもいれ塩ニ漬るを茎漬といふ

△生薑酒 酒ニ生姜を和する也　(俳)しやうが酒医者の申しさればこそ　可風
(狂)先をまはりかせけとなんと生姜酒からくも酔る世ニことをあれ　徳四

△雞卵酒 酒ニ玉子を和したるも妙なる仕かた料理重宝記ニくはし

△鍋焼 (俳)湯やきでやあたゝかに朝ニ口焼くもなり　苑羅

△杉焼 杉の香を魚肉ニうつされ移さんがため杉板のうへにてやく
(俳)箱ニゝ煮るもあり杉やきをやいてくれては路ぬ底の塩　一丸

△風呂吹 △大根ふろふき △かぶらふろ吹。いづれも大根なと湯煮して、しほみそとろけく食れ
(俳)ふろ吹や客ありけの人へおくり　杜橋
(狂)むかしハむかしかつてのおまさハ人くよろこひ出けるふろ吹　占安

△納豆汁 大豆を煮て土室に入ねさせ寝かしまたくまられ包

納め貯へ用るゝ板上にてよく
ゆでき末こゝつの緑の汁のごとしく
煮るやうに或ハ塩酒魚鳥などく
ハへくも煮やうりと僧家にて知む

俳　はくもくとぼうとうれい納豆汁　許六
此句も禅僧の意をふくめり

注　納豆の汁ハ豆腐の好ぶるものゆ
えあくまうるかいとこれとも　百松

柚味噌　俳　祇陸まつくらゝ尼の
柚　北混

蕎麦湯　そばゆ
そばこの粉を湯ふ和し
て喰ふをそば湯なり。そばゆ
い蕎麦の粉をすり丈火にて焼移る時ハ
ゆめのおくゝるをだし汁をかけ
て食用ゝん。そばゆ　もりふ

俳　蕎麦粥やおねをのやうにまた天戯
○右飲食のるい温熱を賞して喰ふ
ゆへ冬の季ゝん。製法委しく日
本歳時記に出て見るべし